

「いじめ」の基底¹⁾

—グループ・ダイナミックスの視点から—

矢 守 克 也 *

Group dynamics of bullying in schools

Katsuya YAMORI

要 旨

「現代のいじめ」は、それと対置される「昔のいじめ」とは、集合体の《秩序》の生成・維持に関わるグループ・ダイナミックスがまったく異なる。「昔のいじめ」は、既在の《秩序》を、集合体内部の〈差異〉を基盤として維持・強化する機構であった。一方、端的な「無視（仲間はずれ）」、いじめの標的の浮遊性、いじめの標的選定契機の任意性の3点を特徴とする「現代のいじめ」は、集合体の内部と外部を区別する絶対的な〈差異〉を穿とうとする試みである。すなわち、「現代のいじめ」は、本来ありうべき相対的な〈差異〉が抹消された、言い換えれば《秩序》を失った集合体の成員（子供）たちが、その回復を意図する過程で示す過剰な反応である。〈差異〉の抹消は、かえって、最も純化された形で〈差異〉の生成活動を惹起した。すなわち、集合体内部の相対的な〈差異〉を超えた、超越的な〈差異〉を形成しようとする試みである。これが、「現代のいじめ」を支える基底的構造である。

I. はじめに

本稿を、いささか不謹慎な冗句から書きおこすことを容赦されたい。

「あの人さえいなければ、教授会（学部会）だって、もっとスムーズに運ぶのに…」と、スタッフ全員が口を揃えるその人物が去ったとしても、翌日には、その役割を引き継ぐ人物が現れる—この挿話は、いったい何を物語っているのだろうか。おそらく、それは、「集合体の《秩序》の生成・維持のためには、〈差異〉が必要不可欠である」という事実であろう²⁾。

本稿は、この命題を所与とした上で、次のことを示すことを目的としている。いじめは、集合体の《秩序》の生成・維持機制として機能してしまっている³⁾。と同時に、「現代のいじめ」（特に、最近のいじめを指す。その特徴は後に明らかにする）と、「昔のいじめ」（具体的には、「弱者」いじめ、ガキ大将的いじめ、下士官いじめ等を念頭においている）とは、《秩

序)の生成・維持に関わるグループ・ダイナミックスがまったく異なる⁹⁾。

II. 2つのいじめ

はじめに、「現代のいじめ」の特徴として指摘されていることがらをまとめておこう。小浜(1985)、赤坂(1991)の考察、鈴木・佐藤・篠原・吉田(1986)や、森田・清水(1994)による実態調査の成果を踏まえれば、最終的には、以下の3点に集約できると考えられる。本稿は、「現代のいじめ」の実態を実証データを用いて詳細に論じることを意図しているわけではない。が、以下の考察の前梯をなす限りにおいて、これら3点を調査データを用いて後づけておこう。

(1) 「現代のいじめ」の特徴

① 端的な「無視(シカト)」「仲間はずれ」…いじめの手段

「現代のいじめ」の手段について、いじめの被害者に対する物理的な、あるいは、言葉による暴力が深刻な問題を提起していることは言うまでもない。1994年5月に控訴審判決が下された「鹿川君いじめ自殺事件」も記憶に新しいところである。

しかし、この一方で、「現代のいじめ」が、多くの場合、マスコミの言葉を借りれば「より陰湿な」手段によって引き起こされている事実を看過することはできない。1987年、文部省が発表した「児童生徒の問題行動の実態と文部省の施策について」の中に、いじめの態様に関する調査データ(計52610件が対象となっている)が報告されている。この調査によれば、「冷やか・し・からかい」「仲間はずれ」「集団による無視」の3項目の合計が、全体の約45%を占め、「言葉での脅し」「暴力をふるう」「たかり」の3項目の合計を、わずかながら上まわっている。

また、鈴木ら(1986)は、計380人の小中学生を対象とした質問紙調査の中で、「いじめとはどんなことか」について自由記述を求めている。その結果、1位にリストアップされたのは、小学生では男女とも「仲間はずれ」、中学生では、男子は「暴力」(ただし、2位「仲間はずれ」、3位「無視」であった)、女子は「無視」であった。森田ら(1994)も、大阪市内の小中学生1700人あまりを対象とした調査において、彼らが心理的いじめ型と名づけた「仲間はずれ」「しつこく悪口を言う」が、他の手段によるいじめに比べて、その発生認知率が高いことを報告している。「暴力」「恐喝」などと比較して、これらの陰湿な手段は、本来表面化しにくいはずである。この点を考慮すれば、「無視」「仲間はずれ」が「現代のいじめ」における手段として際だっていることは明らかであろう。

② 標的の浮遊性…いじめの被害者

先の「鹿川君事件」に見られるように、いじめが特定の被害者に長期にわたって加えられることがあることは確かである。1994年5月20日付日本経済新聞によれば、彼は、短く見積もっても10ヵ月にわたって執拗ないじめを受けている。しかし、この件についても、筆者は、「現代のいじめ」の本質的特徴は、むしろ反対の極にある旨を確認しておきたい。

再び調査データを引こう。東京都教育委員会が1985年に都内の小、中、高校など、計2300校あまりを対象として実施した調査によれば、いじめが継続された期間は、2週間未満が最も多く(例えば、中学校では全体の43.5%)、次いで2週間以上2ヵ月未満(同26.7%)、2ヵ月以上6ヵ月未満(同15.3%)と続き、6ヵ月以上は最少(同14.5%)であった(教育心理編集部、1985)。また、森田らの調査でも、小学校6年生のデータでは、1ヵ月未満が全体の75.5

％、1～2ヵ月が9.6％、3～5ヵ月が6.0％、6ヵ月以上は8.9％と報告されている。

いじめが特定の人間に集中していない事実は、いじめられ体験の拡散傾向にも顕現している。例えば、桜井・宮田（1985）は、いじめられ体験は調査対象者全体の46.9％にのぼっていると報告している。森田らも、いじめられ体験は小学生では全体の62％、中学生でも44％に上り、「現代のいじめ」の重大な特徴として、「いじめっ子—いじめられっ子の立場の入れかわり」を指摘している。

いじめの継続期間、いじめ（いじめられ）の経験に関する調査は、非常に多く行われているので、上記の調査はほんの一例にすぎない。が、多くの調査が、「現代のいじめ」においては、特定の被害者が長期間いじめられるのではなく、むしろ、いじめの標的は浮遊する傾向を示唆している。この事実は、特定の被害者に対するいじめが長期化した場合の悲劇の深刻さに覆い隠されることが多いが、この本質を見きわめる上でも見逃せない事実である。

③標的選定契機の任意性…いじめの契機

この点についても、多くの調査データが存在する。例えば、先に触れた鈴木らの調査の中に、いじめた理由、および、いじめられた理由に関する調査項目がある。いじめた理由については、特に中学生で、いじめの標的の選定契機が任意化する傾向が強いことが示されている。すなわち、男女とも、1位は「気に入らない」であり、「しかえし」「相手が悪い」などを上まわっている。これに呼応するように、いじめられた理由の1位は、小中学校、男女を問わず、「理由がわからなかった」であり、「遊びをこたわった」「悪口を言った」「態度が悪かった」など、何らかの形で理由が特定されたものを上まわった。また、先に紹介した東京都教育委員会の調査でも、主ないじめの動機としてリストアップされたのは、「面白半分」「欲求不満のうっ憤ばらし」という、「理由なき理由」が、全体の52.7％を占めた。

以上、「現代のいじめ」を特徴づけるであろう3点について、調査データを援用しながら略述してきた。以下、これまでの準備作業を土台として、「現代のいじめ」の本質的構造について、この対極にある「昔のいじめ」と比較対照しながら説明していこう⁶⁾。

（2）「昔のいじめ」と「現代のいじめ」

「昔のいじめ」は、要するに、既在の《秩序》を、集合体内部の〈差異〉を基盤として維持・強化する機構であった。つまり、一部の集合体成員（ガキ大将や上官や姑）が、特定の成員（弱い者や下士官や嫁）を、しかも、「理由つき」でいじめるという点で、「現代のいじめ」を特徴づける上記3点と正反する性格を有していた⁷⁾。

後の行論の下準備として、ここで強調しておきたいことが2つある。第1は、こうしたいじめが可能であるためには、集合体内部に〈差異〉があまねく存在している必要がある点である。事実、かつて、子どもの身のまわりには、ありとあらゆる〈差異〉が存在していたし、また、〈差異〉は存在しうる、との認識が通用していた⁸⁾。第2に、この種のいじめは、一つの《秩序》の内部で生じる出来事であるから、そこに刻印される〈差異〉も、たかだか、一つの集合体内部での相対的なそれに過ぎない。すなわち、負の烙印が捺されるにせよ、それは相互に了解可能な一つの《秩序》の中におけるそれにとどまる、という点が重要である。

一方、「現代のいじめ」は、集合体の内部と外部を区別する絶対的な〈差異〉を穿とうとする試みであると解釈できる。したがって、ここで言う内部と外部との境界＝〈差異〉は、端的に設定される必要がある。端的に、ということの意味は、「理由なく」ということである。なぜなら、もし、その〈差異〉が相互に了解可能な〈差異〉として構成されれば、境界の外部へ括り出されたかに見える者も、まさに了解可能であるというその事実によって、集合体の内部

にとどまることが可能となるから。さまざまな既存の了解可能な〈差異〉を基盤とする「昔のいじめ」は、この段階にとどまっていたのである。

しかし、端的な無視や仲間はずれに基づく「現代のいじめ」はどうか。「なぜ、いじめられるのか、わからない」という被害者の悲痛な叫び、「何となく」「ちょっとむかつくから…」という加害者の乾いたセリフは、「現代のいじめ」が、「昔のいじめ」とはまったく異なるグループ・ダイナミックスに支配されていることをわれわれに語りかけている。いじめの被害者は、了解可能な内部において負の烙印を背負わされているのではなく、端的に排除され、端的な外部として扱われているのである。これが、「現代のいじめ」の第1の特徴—端的な「無視（シカト）」—の機制である。

では、第2の特徴—標的の浮遊性—にはいかなる必然性があるのだろうか。これは、上に描いた過程を強化、ダメ押しするための仕組みであると解釈できる。すなわち、たとえ、端的な無視であっても、それが特定の個人に持続的に加えられれば、そこに何らかの必然的理由が読み取られる可能性が生じる。集合体の外部に排除する人物（いじめの標的）が、無作為に浮遊するのは、この可能性を完全に摘みとるためのメカニズムなのである。

最後に、第3の特徴—標的選定契機の任意性—の意味は何か。いじめの標的とされる子は、平均値からわずかでもズレていけばよい。昔のように、明らかな負の徴標を帯びている子（だけ）がいじめられるのではない。正の方向へのズレも、十分、いじめの契機となる。要するに、いじめの標的は「だれでもよい（任意である）」ということである。つまり、何らかの〈差異〉が既在して、それが原因となっていじめが起こるのではない。任意のことがらが契機となっていじめは起こり、しかる後に、本来事後的に形成されたはずの〈差異〉が、顛倒して、いじめの原因であったと了解されるに過ぎないのである。

III. 「現代のいじめ」—その基底的構造

では、なぜ、子どもたちは、このようないじめに従事するのか。なぜ、こうしたいじめがなくなるのか。そのことを考えるために、先の3つの特徴を手がかりに、さらに考察を進めていこう。

土屋（1994）などが指摘するように、「現代のいじめ」においては、あらゆることがその契機となる。他人よりほんのわずか背が高くても、低くても、勉強ができて、できなくても、先生に叱られても、褒められても、走りっこで1等になっても、ビリになっても、いじめは起こる。だれもが「ジョーカー」を引く可能性をもっている。そして、いったん「ジョーカー」をつかまされれば、当分の間、全員一致の、理由なき、端的な無視にさらされる。これは、いったい何をしようとしているのか。

筆者の考えでは、「現代のいじめ」は、おそらく、本来ありうべき相対的な〈差異〉が抹消された（＝言い換えれば《秩序》を失った）集合体の成員が、その回復を意図する過程で示す過剰な反応なのである。多くの論者が主張するように、いわゆる「管理教育」は、子どもたちの集合体が抱えていた〈差異〉を徹底的に解消する機能を果たした、と言ってよい。しかし、〈差異〉の抹消は、子どもの世界から《秩序》を奪い取り、その結果として、逆に最も純化された形での〈差異〉の生成活動を惹起した。すなわち、集合体内部の相対的な〈差異〉を超えた、超越的な〈差異〉を形成しようとする試みである。これが、「現代のいじめ」を支える基底的構造ではなかろうか。

さて、多くの読者は、ここでの議論に、民俗学的モチーフを感じとられるであろう。すなわ

ち、ひとつの閉ざされた《秩序》空間（例えば、ムラの集合体）は、かならず、異人—「異常人物」「マレビト」「悪きもの」などを排除する装置を秘めている、とする考え方である（詳しくは、小松（1985）、赤坂（1994）などを参照されたい）。筆者自身、「現代のいじめ」のグループ・ダイナミックスと、異人排除（同時に、それは、異人崇拜を伴うことが多い）のそれとの間には、明らかに同型性が存すると考える。

とりわけ注目しておきたいことは、異人排除に関する今村（1992）や赤坂（1994）らの指摘である。彼らは、異人（今村の言う第三項）の選別過程が限りなく偶然的かつ恣意的であることを強調している。つまり、今村らは、次のように主張している。異人に対する排除記号は、集合体の内部を外部との〈差異〉として反照的に規定するために、換言すれば、集合体の《秩序》を維持するために、そのつど新たに創出される。裏を返せば、「あらかじめ指定された排除記号といったものの本来存在しえない。誰でもよい、誰かを第三項（犠牲者）にすることで、相互分身状態のカオスを終焉させる」（赤坂（1992）;p.272）のである⁹⁾。

以上の見解は、異人をいじめの被害者に、排除記号を〈差異〉に擬しさえすれば、本稿におけるわれわれの主張と大略重なることは言うまでもない。赤坂自身、以下のように述べている。「現代のいじめ問題は、こうした民俗学上のテーマにも通底する排除の構造（とそれに伴う《秩序》の生成・維持（筆者挿入））という主題のひとつの変奏として読み解くことが可能である（赤坂（1991）;p.38）」¹⁰⁾。

IV. いじめの解消へ向けて¹¹⁾

まず、小浜（1985）の非常に示唆に富んだ議論を紹介しよう。小浜は、現代のいじめに関して、まったくあたりまえとして見過ごされている条件を12点挙げた上で、次のように指摘する。「ここで列挙した条件¹²⁾が指摘しているものは、明らかに私たちが少年のころ、集団的な『遊び』において実現させていたものばかりである。『缶けり』『追いかけごっこ』『母艦水雷¹³⁾』など、5人を越える人数が集まると…」(p.176-177)。

ここで言わんとすることは、もちろん、「いじめは遊びの一種だ」などということではない。また、いじめ克服のために集団遊びを復活させよ、といった短絡的な提言を行いたいわけでもない。重要なことは、子どもたちが自発的に集合体を形成し、集合単位で行動するときの複雑な様式、すなわち《秩序》が、これらの遊びにおいてたいへんよく実現されていた、ということである。いじめ克服の鍵のひとつは、子どもたちが自前の《秩序》を自律的に形成する機会を（集団遊びに限らず）提供することであろう。

また、管理教育における〈差異〉の消去作業に関連して、負の烙印とともに、正の烙印の除去までが必要以上の徹底さで実行されたのではないかとの疑念もある。この問題の背景には、おそらく、さまざまな事情が複雑に絡みあっているであろう。したがって、筆者がここで生半可に論じることは不適當かと思う。が、筆者自身、子どもごころに不思議に感じたものである。何故に、皆勤・精勤の表彰、運動会・演奏会において学級対抗の形式をとること、成績向上者を人前で褒めること、クラブの対外試合において活躍した者を朝礼で表彰することが、「悪」なのか¹⁴⁾。これらは、すべて、筆者が小学生、中学生であった期間に、（少なくとも、筆者が通った学校において）実際に消えてなくなったものである。

あえて主張しておきたい。いじめ解消のポイントは、〈差異〉を抹消することではない。むしろ、無数の〈差異〉の生成である。つまり、徹底的に多次元化された〈差異〉の生成である。多次元化され、子どもたちの周りに満ち溢れた〈差異〉は、彼らの集合体に《秩序》を回復す

るとともに、一つ一つの〈差異〉を相対化し、無毒化するという重要な役割を果たす。たしかに、こうした〈差異〉の復活は、深刻な問題を伴うかもしれない。しかし、「全員対一人」という悲劇的ないじめの実情を、幾分ましな、別の構図へと転換できる可能性も秘めていると思う。

【註】

- 1) 本稿は、日本グループ・ダイナミクス学会第42回大会（1994年10月）において企画された公開シンポジウム（学校適応とグループ・ダイナミクス）における発表原稿を加筆・訂正したものである。
- 2) 誤解を恐れずに言うなら、ここで確認しておくべきことは、後継者なる人物のふるまいが実際に変化するのではない、ということである。実態は、むしろ、集合体が、その《秩序》の維持のために後継者の役どころを捏造するのである。
- 3) ここで、《秩序》という用語に、十分注意をされたい。集合体の《秩序》は、〈差異〉の体系の上に組み立てられる。つまり、集合体の《秩序》とは、①諸個人が、自己の存在の意味を相互の〈差異〉を基盤として、また同時に、②集合体が、その存在の意味を集合体の内部と外部との〈差異〉として、安定的に確保していることである（大澤、1994）。要するに、本稿の《秩序》には、何らの価値的意味は含まれていない。単に、集合体のグループ・ダイナミクスを表示する中立的な用語として使用されるに過ぎない。だから、何らかの視点から判断して、価値的に負のレッテルを貼られた集合体にも、当然、《秩序》は存在する。

したがって、ここでの主張は、いわゆる「いじめ必要悪論」「いじめ擁護論」とは明確に峻別されるべきものである。すなわち、本稿は、いじめによって、学級、あるいは、学校生活の（日常用語に言う）秩序が保たれている、といった通説を傍証しようとするものではない。筆者は、いじめが、集合体、および、個々の子どもたちの同一性の獲得・維持に利用されている（必要ならば、悪用されている、と言い換えてもよい）と主張しているに過ぎない。

集合体の《秩序》の生成・維持は、〈差異〉を媒介しなければならぬが、その方途はさまざまでありうる。すなわち、子どもたちの集合体の《秩序》を生成・維持する方途は、いじめ以外にもありうる。目下の問題は、それら多くの可能性のうち、いじめという最も稚拙で、残酷な方途がとられてしまっている、という現状にある。この件については、Ⅳ節において、他の可能性の一端を探る。

以上冗長をも慥れず、注釈を加えてきたのは、いじめが、重大な社会問題として現存している今日、筆者としても不本意な誤解だけは避けたいとの思いからである。以上の諸点について斟酌いただきたいと思う。

- 4) 註3に関連して、いじめ問題に対するアプローチについて、小浜（1985）は次のように明言している。「もともと社会現象は多元的で、人間自身が引き起こすくせに、目に見える原因を指摘することの困難な、不可解なものが多い。しかしいじめの現場は、被害者からすれば深刻であるから、その深刻さが呼び起こすあせりから、短絡的な、また手近な契機を原因であると思いこんでしまうのである。たとえば、…（中略）…これらは状況の契機としては当たっている場合が確かにあるが、いじめの原因と考えることはけっしてできない（p.173～174）」

一方、赤坂（1991）も、「いじめを倫理や道徳のレベルから断罪するのはたやすいが、子どもたちの現実に対してはほとんど無効であると言ってよい。子どもたちのいじめが、学校を現場として再生産されつづけるかぎり、学校という場にそくして問題は読み解かれねばならない（p.13）」と述べている。筆者も、これらの見解に全面的に賛成である。筆者としては、本稿の記述が、小浜の言う「原因」に言及していることを願うのみである。

- 5) よって、筆者は、しばしば見かける「いじめは昔からあった」とする認識には、この意味において与えるものではない。つまり、いじめという名辞で呼称されるところの営みが、過去において存在したことは同意する。しかし、グループ・ダイナミックスの見地からすれば、筆者の言う「現代のいじめ」は、「昔のいじめ」とはまったく異質のものであると主張したい。
- 6) 予め注記しておけば、本稿における「現代のいじめ」と「昔のいじめ」との対比を、赤坂(1991)は、「全員一致の暴力ないし供饑としてのいじめ」と「人間相互の交通(コミュニケーション)のひとつの形態ともいえる昔ながらのいじめ」の対比として描いている。
- 7) 「理由つき」とは、そのことに正当な理由がある、という意味では決してない。すなわち、先に引用した調査で報告されていた種々の理由—「遊びをこたわった」「悪口を言った」「態度が悪かった」「生意気だ」など—は、ここで言う、「理由つき」であるが、当然のことながら、これらの理由が存在するからと言って、いじめが正当化されるわけではない。
- 8) 例えば、男—女、大人—子ども、親—子、先生—児童、上級生—下級生、喧嘩の強い子—弱い子、運動の得意な子—不得意な子、勉強のできる子—できない子、金持ちの子—貧乏な子、先生に素直な子—反抗する子、などなど。
- 9) したがって、誤解をまねく危険を承知で述べれば、仮に本稿に言う「現代のいじめ」の純型が存在したとすれば、そこでは、「どのような子がいじめられやすいか」「何が、いじめを誘発したか」などといったことを事細かに調べることは、ほとんど無意味である。いじめの原因だと思っているものは、実は、いじめの結果に過ぎないのだから。
- 10) いじめの問題に関する、本稿のアプローチが、「ふつうのグループ・ダイナミックス」からは、幾分(あるいは、随分)逸脱している点については、筆者も認めるに吝かでない。が、この種のアプローチは、けっして奇を衒ったものではない。本稿の随所でリファーしている赤坂(1991)による民俗学のアプローチ、小浜(1985)による現象学のアプローチにも見られるほか、記号的相互作用としてのいじめを論じている菅野(1986)や山口(1988)の主張にも、本稿と相通する部分がある。
- 11) 筆者には、有効な解決案を呈示する能力も資格もない。ここでの議論は、いじめに関する筆者の認識が、幸いにして正鵠を射ているとすれば、論理的必然性として、以下のような解決手段が検討されてしかるべきであろう、という程度のものに過ぎない。
- 12) いじめは子どもしかやっていない／いじめは大人の見えないところで行われる／いじめをやる子は「ふつう」の子である／いじめは集団的に何か意味のある行動らしい／いじめには相当の精力と気力を必要とする／いじめ関係が成立するのに、団結とか、強力な組織化とかいったものは、必要とされない。ほとんどあつという間にこの関係は形成される／いじめが成立するのに必要なものは、みんなの暗黙の合意だけであり、共通の道具とか、複雑なルールはいらない／いじめは対人攻撃的な行動であり、相手の負け犬状態を見届けないと満足できないという意味で、一定の成果を期待した行動である／いじめは、小学校中・高学年から中学校にかけて集中的に現れる、などの12点である。
- 13) 筆者自身、「ぐんかん」と呼んで、小学校5、6年の頃、熱中していた記憶がある。
- 14) 筆者は、教師の口からはっきりと、「悪」である、と教わった。

引用文献

- 赤坂憲雄 1991 学校／差異なき分身たちの宴—いじめの場の構造を読む—赤坂（著）「新編排除の現象学」1章 筑摩書房
- 赤坂憲雄 1992 「異人論序説」ちくま学芸文庫
- 赤坂憲雄 1994 「遠野／物語考」宝島社
- 今村仁司 1992 「排除の構造」ちくま学芸文庫
- 小浜逸郎 1985 「学校の現象学のために」大和書房
- 小松和彦 1985 「異人論—民俗社会の心性」青土社
- 教育心理編集部 1985 いじめっ子・いじめられっ子の実態 教育心理、33、906—911。
- 森田洋司・清水賢二 1994 「新訂いじめ—教室の病い」金子書房
- 大澤真幸 1994 混沌と秩序—その相互累進 「社会システムと自己組織性」（岩波講座社会科学の方法 X）8章 岩波書店
- 桜井茂男・宮田 敬 調査研究／いじめっ子・いじめられっ子 教育心理、33、942—947。
- 菅野盾樹 1986 「いじめ＝〈学級〉の人間学」新曜社
- 鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄 1986 いじめの社会心理学的研究 熊本大学教育工学センター 紀要、3、97—115。
- 土屋 守 1994 「500人のいじめられ日記」青弓社
- 山口昌男 1988 「学校という舞台—いじめ・挫折からの脱出」講談社

abstract

Group dynamics of 'recent bullying' in schools differs much from that of 'traditional bullying.' The basic function of the traditional one was to maintain social order in a collectivity (e.g. a classroom or a school) on the basis of relative 'differences' among pupils within the collectivity. In contrast, the recent one, which is characterized by (1) complete disregard for victims, (2) victims in rotation, and (3) arbitrary selection of victims, is a mechanism for setting absolute 'differences' on the boundary of the in-group by excluding the victims from the collectivity. In other words, the recent bullying should be regarded as pupils' excessive reactions for recovering the 'differences', i.e., social order in a classroom which was lost by over-emphasized school administrations based on an equality principle. The erase of 'differences' in schools induced children to be eager to salient 'differences' among them. This is the fundamental group dynamics underlying the recent bullying in schools.